

## 「人口爆発」の二〇世紀から「高齢化」の二 一世紀へ

―高齢者の「政治代表制」を考える―

尾崎美千生

元毎日新聞編集委員

私は「アラフォ」ならぬ「アラコオ」を自称してきた。それもしばらく前までは友人たちに「アラコオのコオは『古来まれなるコオ』（古希・七〇歳）」と吹聴してきた。しかし今年九月一五日、自分の誕生日が過ぎてみると、私は早や七五歳の「後期高齢者」のコオの仲間入りを果たしていることに気がついた。げに

「ただ過ぎに過ぎるもの」は「帆かけたる舟。人の齢。

春、夏、秋、冬」（枕草子）ではある。

### 高齢化世界のフロントランナー

歳をとることの速さに感心しているうちに、私たち

は評論家・樋口恵子さんの言う「人生一〇〇年時代」のスタートラインに立たされ、しかも私たちの国は世界の中で高齢化競争のフロントランナーに躍り出ていることがわかる。日本の国では第二次世界大戦のあとの海外からの大量引揚げと、折から起こったベビーブームのせいで「過剰人口」が戦後最大の社会問題になった。日本列島を覆った人口増加の洪水は敗戦直後の食糧難で、文字通り人と口（食）の緊張関係を生み出した。律儀な検察官が法に準じてヤミ米に手を出さなかつたばかりに、栄養失調で倒れたことが美談として新聞を賑わしたのもこのころである。

### 戦後日本の成功物語

しかし、律儀者の日本人は官と民をあげての奮闘ぶりで「新生活運動」と銘打って「産児調節」（家族計画）運動を成功させ、西欧諸国が半世紀もかかった「多産多死」から「少産少子」への「人口転換」をわずか

一〇年で成し遂げた。子どもの養育に当てられていた家計費や国家予算は貯蓄に回され、財政投融资を通じて国のインフラ整備に投入され、成長した子どもたちの労働力と相まってやがて日本経済の高度成長のレールを敷いたのである。

この戦後日本の成功物語は、そのあと台湾や香港、シンガポール、韓国などの「アジア・ニーズ」に引き継がれ、「アジアの奇跡」をもたらし、「人口ボーナス」として国連でも推賞する経済モデルともなったのである。

だが、わが国は昭和六〇年代からの高度経済成長を謳歌したあと、一九八〇年代の最後にやってきたバブルの崩壊以後は、経済成長、労働力、購買力などの面であつての成功の裏返し歴史として、「失われた一〇年」「二〇年」の時代を刻印した。これらの結果、現役世代が引退後のお年寄りの面倒をみる社会保障システムは「一〇〇年安心」どころか、先の見えない

窮地に堕ち込んだ。大平正芳・元首相が早くから「今をときめく日本の繁栄は、長い歴史のなかの一瞬の行幸かも知れない」と予言していた言葉を証明することになったのである。

### 「成功は失敗のもと」

一時は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」(ポール・ケネディ)と二一世紀の主役とも目された日本の凋落ぶりは早かった。じわじわと押し寄せてくる少子高齢化の波には早くから多くの人が警告を発していた。しかし、何十年も先を読む人口の分野での将来予測は、日々の暮らしを巡る葛藤に明け暮れる政治の舞台では真剣な注目を浴びることは少なかった。二〇〇四年に現実に人口減少がデータの上に見え始めた時、さすがの政治家たちもうろたえ始めた。だが、一人の間が赤ん坊から成人に達するのに二〇年もかかるこの世界で、出生力上昇の即効薬は見出せなかった。

気がついてみると有史以来、上昇カーブを描いてきたわが国の人口ラインは初めて減少に転じ、若い人口割合の低下と長寿化の進展で世界に冠たる「高齡社会」に変貌していた。フランスで一・一五年間、英国で四七年、ドイツで四〇年かかった六五歳人口七%の「高齡化社会」から、「化」の字が取れた一四%の「高齡社会」に変身するのにわずか二四年の歲月しかかからなかったのである。そしていま全人口の四人に一人が六五歳以上（二四%）という社会に住んでいる。そして二〇六〇年には全人口のうち約四〇%が高齡者になる時代を迎えようとしている。戦後の急激な人口増加の勢いに歯止めをかけた成功が、いまや世界一速い「超高齡社会」の実現に結びついたのである。

## 地球丸ごと高齡化

戦後の過剰人口克服の「成功」をいま「失敗」と断ずることは出来ない。お隣の「人口大国」・中国で急増

する人口にブレーキをかけるため一九七九年から実施されている「一人っ子政策」と同じように、人口の抑制策は一九六〇年代には世界の人口問題の緊急課題であった。いまでこそ「一人っ子政策」には「人々の子ども数を決める選択権を奪う人権無視の政策だ」という批判がある。だが、中国が同政策を採用したために世界で約四億人の人口増加を免れたという功績は、世界の飢餓や環境問題の観点からむしろ評価されるべきだとする意見も少なくない。

高齡化問題は今日、先進国だけの問題ではなくなつた。国連の統計によれば、二〇一〇年に一五・九%だった先進国全体の高齡化率は二〇五〇年には二六・二%となる。一方、二〇一〇年に五・八%だった開発（発展）途上国の六五歳以上の高齡者は二〇五〇年には一四・八%となる。四〇年後には「地球丸ごと高齡化」の時代がやって来るのである。二〇世紀の「人口爆発」時代から、二一世紀は「高齡化」の時代へ―宇宙

船地球号」の世界は確実に変化する。国連で一九六九年以来世界の人口問題に取り組んできた国連人口基金（UNFPA）が、今年一〇月一日の「国際高齢者デー」に「二一世紀の高齢化 祝福する成果と直面する課題」と題する報告書を世界に先駆けて日本で最初に発表したのも日本の責任と役割をアピールするためであった。

### 高齢化政策決定の場が高齢者の参加を

日本では「近い将来」、衆院の解散総選挙が行われる。参院でも二〇一三年七月の議員任期満了時には通常選挙が確実に実施される。原子力を含めた新たなエネルギー政策、消費増税、社会保障のあり方、TPP（環太平洋パートナーシップ協定）など争点となる課題は多い。しかし、世界が見つめる日本の「少子高齢化」の問題を真正面から取り上げようとしている政治的グループは少ない。少子化が避けられない以上、元氣な

高齢者や老老介護の主たる当事者である高齢女性のあり方が家庭や社会の焦点となることは不可避である。それは「保護されるべき存在」としての高齢者のみならず、市場と税収の拡大を図るべき経済の新たなアクターとしての可能性を含んでいる。それにもかかわらず、政治の舞台や各種審議会など政策決定の場で高齢者を排除する仕組みが一向に改善されないのはどうしたわけか。

二〇〇八年に話題になった後期高齢者医療制度の迷走は政府案の決定過程に高齢者が唯一人しか参加しなかったことに端を発した。また政界では中曽根康弘、故宮澤喜一両氏が政界の若がえりのために政界からの引退を迫られたことがあった。当時は派閥の長老がいつまでも残って老害をまき散らすという派閥全盛時代の残滓が問題であった。

国会の「庶務部議員課議員係」の調べでは、衆院定数四八〇人のところ六五歳以上は八〇人で、率にする

と一七％、七〇歳以上は五％、七五歳以上は一％である。他方、参院では定数二四二のところ、六五歳以上は六八人で二八・一％、七〇歳以上は二二・八％、七五歳以上は四・五％である。しかも、民主、自民、公明の三党は未だに衆参両院にわたって選挙区、比例区の一部に候補者の年齢制限を規定しているのである。いま全人口の四人に一人が六五歳以上となった社会の中で、現在概ね七〇歳定年を敷いている審議会委員などを含め、高齢者の政治的代表制が再検討されるべき時期を迎えているのではあるまいか。

### 高齢者の政治意識

他方、一般の高齢者の政治意識はどうであろうか。ここに一つのデータがある。「高齢社会NGO連携協議会」（堀田力、樋口恵子共同議長）が数年前、六〇歳以上の人二五〇〇人を対象に実施した「オピニオン調査」である。それによれば、

①年金などの社会保障制度、政治の動向、地球環境問題などに対する関心は男女ともに三〇％から五〇％を占め、生活環境を取り巻く内外の課題に対する関心が極めて高いことが示された。

②これらの人々の新聞やテレビを見聞する割合は極めて高く、「読まない」「見ない」人は二％から三％に過ぎず、六五歳から八〇歳までの男女の七二％から七六％が新聞を「よく読む」と答えている。

余談だが、新聞社は購読者への販売戦略を立てるため「購読モニター」を委嘱しているが、モニターには六五歳以上の人は含まれていない。「回答をメールでもらうため」としているが、六五歳以上の人の声を除外しているのはマスメディアもまた高齢社会への対応が遅れていることの証明ではないだろうか。

### 結び

私たちが高齢者の「政治代表制」を訴えるのは「年

寄りのエゴ」のためではない。二〇六〇年には日本の総人口が八七四万人（国立社会保障・人口問題研究所推計）まで下降することがほぼ確実になっているとき、日本の経済活動を拡大する上で男女を含む元気な高齢者の市場参加は不可欠である。超高齢化社会に対する社会保障政策の拡充とともに元気な高齢者が経済活動の一翼を担うことは医療費の削減という消極的側面だけでなく、社会の活性化に資する大きなフロンティアである。

各種選挙における高齢者の投票率の高さから政策や予算配分が高齢者に偏り過ぎているとの批判はよく知っている。私たちは若者の政治活動を活発にするため参政権を一八歳に引き下げることに賛成である。しかし、投票率の低いことは若者自身の問題であることも事実である。高齢者と若者がウイン、ウインの関係で未来のために明るく、活気のある社会を目指して全世代で共同作業をして行こう。米国やEUにあるよ

うな「年齢差別禁止法」の制定にも力を合わせよう。世界の人口問題に熱心に取り組んだ福田赳夫・元首相は「五〇、六〇は鼻たれ小僧、七〇、八〇は働き盛り、九〇になってお迎えが来たら『まだ早い』と追いつ返し」という戯れ歌を歌っていた。いまわれわれはその「とば口」に立っているのである。